

音楽劇制作におけるラウンド・ロビンの活用

——保育者の音楽表現と汎用的資質——

高須 裕美

I. 問題の背景

保育者養成の短大に通う保育学生は、「制度」「感性」「技術」の能力の中で、「技術」を学ぶことを最も重視している傾向があるということを2014年の調査で明らかにした（小柳ら，2014）。ところが、2015年度の継続調査では、「感性」は保育者に必要な素養であることを学生らは認識していることも明らかになった（高須ら，2015）。その中で保育者の認識に関する質問では、「他者と意見を出し合う、気持ちを共有する」というような内容が最も多く抽出され、学生のイメージする「感性を磨く場」というのは、いわゆる芸術鑑賞よりも、文化活動コミュニティの場への参加であり、他者と協同しながら自らの感性を見出せる場所であると認識している傾向があることを明らかにした。これは、保育者養成で学ぶ学生の考える保育者の感性の育成は、集団の中で育まれるべきものであるという視点を持つ傾向があることを示している。

保育者の表現力や感性に関する研究は十分な積み上げがない。子どもの感性については、鈴木（2009, 2013）が研究を進めており、子どもが「感受する」だけでなく「他者との関わりの中で表す表現力を伸ばす力」の必要性を示唆している。つまり「他者との中で表す表現力を伸ばす力」は、保育者の資質とも捉えることができる。

現状の保育士養成課程における授業は、音楽技術の習得を基盤にした内容が大きな割合を占めている。したがって、保育者の表現力を育成するような文化活動のコミュニティへの参加の場が必要であり、課外で文化的な活動グループに所属していない限り、十分にその機会を保障できているとは言い難い。このような問題の背景から、まずは、保育者自身が他者との関係の中で、何らかのプロジェクトに参加し、作り上げていく過程を教育内容において充実させる必要があると考えた。

本稿は、保育学生の感性の育成を支える授業の1つの方向性として、教育活動における感性の育成に、文化活動のコミュニティの場への参加が、どのように活かされていくのか、そして、どのような学習の手立てや学習デザインが考えられるのか。その接点を明らかにするため、保育士資格を持つ学生が、子育て支援室における音楽劇に取り組む授業における、アクティブ・ラーニングのプロセスを考察しながら、保育者として表現力を促進できるような授業を検討する。

II. 授業の概要

「保育特別演習Ⅱ」は、保育士資格を持つ専攻科2年の前期開講科目である（選択科目）。2017

年度は39名登録で、平均的な出席数は37名程度であった。受講生は、大学では4年生と同じ年齢で保育士資格を持つ専攻科の学生である。初回授業で受講の理由を問うと「学士取得のための単位を取るため」「座学よりも実践授業が楽しい」と答えている。受講生全体を2つの音楽劇グループに分け、講座第8回にお互いの総合表現をリハーサルにおいてクラス内発表として披露する場面を加えた（「おおきなかぶ」と「リトルマーメイド」）。フィールドワークとして学内の子育て交流会に3回程度、数名ずつ交代で参加し、未就園児親子らの様子や音やリズムへの興味の様子に関わり、音楽劇での参加内容について計画・実践している。

専攻科受講生は、保育科2年次に、グループでの音楽劇を経験しているが、実際に子どもの前での実践経験は少ないことから、演習授業である「保育内容特別演習Ⅱ」では、外部の親子を招待し公演した（100名程度の参加）。以上のような授業形態で、子育て交流会に参加し、授業で学んだ知識と実践を経験しながら実践的に課題を見つけていくが、2017年度の授業では、グループ実践の中で表現力を促進する試みとして、複数回の話し合い（ラウンド・ロビン）を加えた。

1. ラウンド・ロビンの活用

ラウンド・ロビンは、山地（2013, 2014）が能動的学習（アクティブ・ラーニング）の実質化において、汎用性が高いものとして挙げている事例の1つである。4～6人組で意見を述べるブレインストーミングを簡易的にしたようなグループでの話し合いで、互いの意見を否定せずに新しい考えを記録し、次の課題を設定する場合に用いる形式のものである。山地（2013）から手順を引用する。

- 1）教員が全体に一つの質問をする（あるいは問題を出す）。
- 2）教員から注意事項として、質問や評価を挟まずに素早く簡潔にアイデアを出していくよう指示する。記録者を決めさせ、また、一巡で終了するのか何度か周るのか、あるいは時間制限をするのか、といった詳細も伝える。
- 3）誰からスタートするか決め、開始する⁽¹⁾。

全体の授業回数は15回で、ラウンド・ロビンを設定したのは3回である。グループ学習では、「役割分担しているはずの内容が、ある特定のメンバーに偏ってしまう」という課題が、短大2年生の授業で見られた。その為、専攻科の授業では、ラウンド・ロビンの話し合いにより、個人が意識的に協同活動することと、音楽劇の表現について相互にフィードバックを得ながら課題を見つけることを目標に設定した。

2. 授業デザイン（NBM 学習サイクルの活用）

Natural Brilliance Model（以下、NBM 学習モデルとする）は、受講生の主体的な学びを促す学習サイクルとして Scheele（2000）が4つのステップを提案している（図1）。

これを本研究の授業内容に当てはめて授業設計すると以下のように考えられる。

Step1）解放：地域の親子に公演する音楽劇の内容を、リラックスした雰囲気の中でブレインストーミングで検討する。リハーサルでは、恥ずかしさを軽減させ、グループ

内での練習に取り組む活動とする。

Step2) 感知：実際に親子の居る交流室を訪問することで、子どもの音楽的嗜好や遊びに打ち込む様子を観察する。人前でも恥ずかしがらず、ユニークに演じたり、演奏したりする経験とする。

Step3) 反応：子育て交流会を複数回訪問する中で得た知識や、保護者から得た情報を実践に盛り込む。ビデオ撮影後の自己評価と相互評価を参考に自己表現の修正を検討する。

Step4) 確認：脚本やセリフが適切かどうかを確認する。音楽劇の成果を音楽実践として地域の子育て世代を対象に公演する。

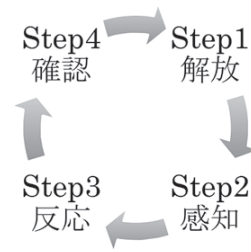


図1：山崎（2016）の作成した NBM 学習サイクル
p. 100 より引用

山崎（2016）は、NBM サイクルを利用した授業デザインとして講義授業「経済史Ⅰ」においてこのサイクルを実践しており、新しい学習内容をゲームなどで楽しい導入として創り出し（解放）、マインドマップというノート法（感知）で教科書を要約（反応）して発表（確認）するという授業設計で、学生のモチベーションを上げることには効果があったことを示している。そこで、筆者の担当する「保育内容特別演習Ⅰ」の授業設計においても NBM 学習モデルを採用し、下記のように再構成した。NBM サイクルの中でラウンド・ロビンを採用することによって、自分自身の意見を述べ、個の表現力の向上を協同活動の中で実践できるのか検討した。

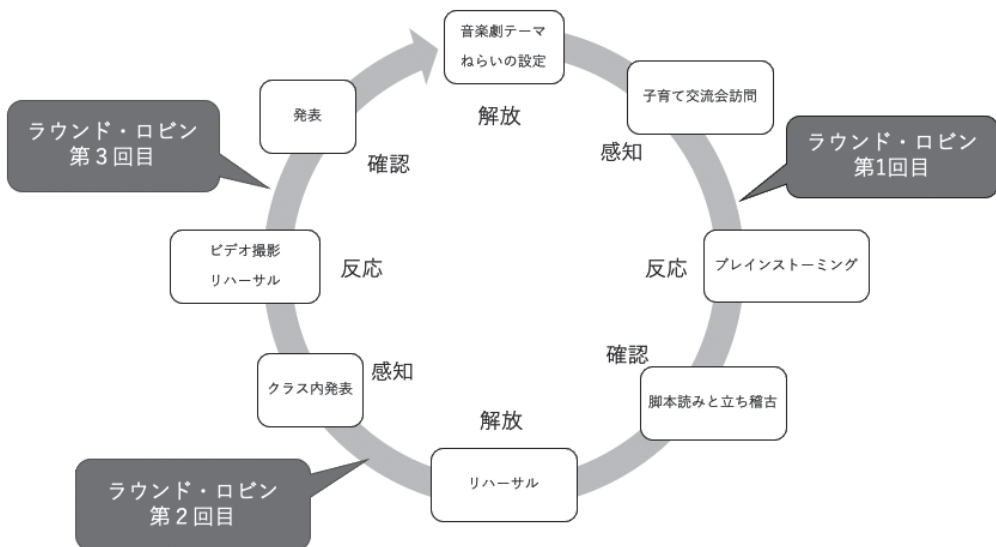


図2：ラウンド・ロビンと、NBM サイクルを採用した授業デザイン

3. ラウンド・ロビンの分析方法

ラウンド・ロビンにおいて、学生は音楽劇のアイデア、キャストのセリフや演技、舞台美術や観客とのインタラクティブな表現について気づきを述べている。2つの音楽劇グループがお互いにリハーサルとして音楽劇を見せ合うことで、自らのグループの表現の向上につなげていくというものである。45分間4～6名ずつのグループに分け、3回の話し合いの議論（一人ひとりの意見）を記録者が提出した。1回の記録は2,400字程度で、3回分の記録の文字数に大きな差は見られなかった。この記録内容を、テキストマイニングソフト（Nvivo）で、語句の出現頻度を分析し、課題を可視化して俯瞰することとした。

III. 結果

話し合いの内容は、1つ目に子どもに伝えるための表現、2つ目にグループ組織運営への参加について大きく2つに分けて分類し、その後カテゴリーの多いものについて下記に表した。

表現に関わるテキスト	
第1回目ラウンド・ロビン	言葉以外の表現手段、子どもの興味、大道具を大きく作る（動かす）、工夫
第2回目ラウンド・ロビン	どのような動き
第3回目ラウンド・ロビン	リハーサル、声の響き方、本番を想定、変化、興味を持つか、道具の動かし方、ミスなく

参加に関わるテキスト	
第1回目ラウンド・ロビン	積極的、取り組む
第2回目ラウンド・ロビン	みんなで、意見を出し合う、協力、負担が掛かり過ぎない、イメージの共有、有意義
第3回目ラウンド・ロビン	完成、有意義、早めに

本分析は、保育者の子どもの音楽理解と表現力を促進する授業に関わるアクティブ・ラーニングを広義で定義して検討を進めているため、分析にあたっては、コメントを表現に関わるもの、授業参加に関わるもの、2つのカテゴリーに大別する必要があると考えた。実際に分別してみると、話し合いの内容について、変化があることが分かった。

表現に関わる語句は、第1回目には、表現の手段や方法についてのものが多く抽出されたが、第2回目の話し合いにおいては、「どのような動き」のみ頻出語句として抽出された。第3回目になると、受講者の関心が再び表現内容に傾いていることが分かる。他方、授業参加に関わる語句に関しては、第2回目の話し合いにおいて、「負担が掛かり過ぎない」「イメージの共有」など、互いに歩幅を合わせようとする語句が多く頻出した。しかし、第1、第3回目の話し合いにおいては、授業参加に関わる頻出語句は、多く出てこなかった。

受講者らは、話し合いを重ねる毎に、さらにその動きを「変化」させようとする意思や、「声の響き方」などの細部にも目を向けている。これらからは、表現を追求することによって、もう1段階上の水準で作品を発信しようとする過程が俯瞰できる。

演じる技術に意見が偏る傾向があることは想定していたが、参加に関わる語句からは、「有意義」という前向きな語句や、「早めに」という計画性を持って運営していきたい意思、仕事内容を分担して協力しながら企画を動かしていこうとする意見が、表現に関わる語句と同程度に頻出していた。つまり、集団における創造性だけでなく、時間配分に関してもすり合わせが度々行われており、計画性を保持しながら展開することが、グループ全体のモチベーションや表現方法に展開するための大きな要因になっていることが示された。指導者は、専門教育になればなるほど、表現力の向上を指導することに教授の焦点を置いてしまいがちであるが、受講者は、そこへ至るまでの「学びの環境」において授業参加につまずきを感じる場合もある。グループ全体の「学びの環境」は、効果的な授業と切り離して考えるべきではないことを記録の詳細を検討することによって気付かされる結果となった。

IV. 考察

本稿は、学生の感性を支える学びの質を向上するためにどのような手立てが考えられるのか、NBM 学習サイクルを手掛かりに授業デザインを工夫し、ラウンド・ロビンの実践記録からの考察を分析するものであった。これらの2つは、アクティブ・ラーニングの手立てを表現力の育成における授業実践に活かせるのかを分析したものである。以下の2つの観点から考察したい。

1. 授業参加における観点

大学の演習授業における学習プロセスの工夫は、溝上（2007）が、文献整理から4つの次元に分けている。1つ目は「高次学習」で、議論、プレゼンテーション、論の整理等が含まれる。2つ目は、「他者の視点強化」で、授業外のブログや電子メディア・システムを導入する取り組みが挙げられる。3つ目は、「授業外のサポート」として学習支援センターや実験室・図書館の解放、4つ目は、「カリキュラム・サポート」として他の専門科目との連携したカリキュラム再編成である。

ラウンド・ロビンによる手段は、授業参加へのモチベーションに効果を求める手立てなので、この次元に当てはめると、1つ目の「高次学習」の次元に分類されるだろう。本稿の授業のような演習科目は、受講者が練習しなければ進歩が現れないため、基本的にアクティブ・ラーニングになるが、その意欲や自分が自分の意思で行動していることを認め、話し合いで振り返りながら、さらに高次的な学びに主体的に変化させようとするものである。指導者である筆者は、学生によって進められていく「学びの態度」が芽生えるように、発話を控えるように意識した場面があった。しかし、演習科目では、指導者から何らかの助言が効果的に加えられる場面も想定される。それは、授業設計ではどのタイミングでどのように与えられるのが効果的なのか。

この科目では、NBM 学習サイクルを授業デザインとして活用したが、ラウンド・ロビンの分析から見ると NBM 学習サイクルにおいては Step3 である「解放」の部分ではないかと考察した。授業回数で述べると1-2回目になる。ここでは、指導者が教示的ではないリラックスした雰囲気の中で、企画のねらいと活動を明確に伝えていくことが必要であろう。同じく、授業中盤のリ

ハーサルも「解放」に位置する。指導者が受講者の表現に対して助言する場面が出てくるが、受講者が萎縮するような指摘ではなく、伸びやかに表現できる状況を維持しながら助言する必要がある。上篠（2014）は、グループでの学びに価値を見出せない学生に対して、協同の価値を情熱的に語るより、価値が見出せる活動を提示することが指導者の役目であることを述べている。また、松尾（2018）は、協同でしか達成できない目標や役割分担などの授業内容の様々な仕掛けと、協同で学ぶ価値や意義、ルールを受講者に絶えず伝えていく大切さを述べている。演習科目における表現に関わるアクティブ・ラーニングは、受講者の人前で表現することへの恥ずかしさが力量を伸ばす足かせになる部分も多く、「解放」の部分での指導者からの前向きで丁寧な助言が求められよう。

「他者の視点強化」については、リハーサルの様子を SNS で共有しており、受講者が自分自身の表現を振り返る取り組みが、簡単に導入できるようになった。「授業外のサポート」として、とりわけ手立ては取っていなかったが、自主的に集まってセリフ合わせをするグループもあった。このようなじっくりと課題に向き合って学ぶ時間こそ、授業参加の意欲や自分が自分の意思で行動していることを認めることによって動かされるものであることから、協同活動においては、指導者の「学びの環境」へのさらなる注視は重要であることが、この次元においても言える。

最後の次元である「カリキュラム・サポート」は、他の科目と連携していくことであったが、これは今後の課題である。本研究は、図画工作特別演習との連携があり、大道具などの制作時間を他の授業で補填することができた。しかし、溝上（2007）は、アクティブ・ラーニングだけでは、知識・技能を修得するだけのカリキュラム体系を目指してしまう落とし穴を指摘している。つまり、短期的な学修だけでなく、即時的な関連は無いが、長期的に重要になると考えられる幅広い学びを見据えた授業設計を考えることが、指導者に求められているということである。音楽劇におけるプロセスで学ぶ表現力は、言葉を話すスピード感、間の入れ方、抑揚、声の大きさなど、実際には絵本を読む時だけでなく、子どもとの対話にも応用できるはずである。しかし、現状では、表現（図画工作、音楽、身体表現、言葉）の領域から波及効果が期待できるような検討はできておらず、科目が点在しているような状況であることから他の専門科目との関連性を見出していくことが求められる。なぜなら、受講者は仮に興味のある一定の演習科目で興味・意欲が上がったとしても、それが座学で学ぶ専門事項への興味へと必ずしも繋がらないからだ。

2. 表現についての観点

第1回のラウンド・ロビンの記録では、言葉以外の表現手段についての語句が頻出した。これは、NBM 学習サイクルの「感知」において、キャンパス内にある子育て交流室に3回訪問したことにより、未就園児の音楽嗜好や遊びに注視して観察してきたことが影響したと思われる。内山ら（2015）は、保育者養成の学生が、マザーリーズの講習と実際に乳児に関わる実践の前後に、絵本の読み聞かせの速度感を測定したところ、読む速度がゆったりした速度に変化していることを確認している。つまり、キャンパス内で親子が触れ合える設備を学ぶ場として活用することは、功を奏していると言えよう。文部科学省も「音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わ

う」ために「教師がこのような幼児の音楽に関わる活動を受け止め、認めることが大切」であることを示している。小畑（2020）は、現代の子どもが、さまざまなメディアから多様な音楽文化に触れる機会に恵まれていることから、「教員が子どもの多様な声、多様な発声を受容し、その上で、どのように歌いたいのか、その歌にどのような発声が合うのかを、子ども自身が探索できるように導くことが求められている」とし、教員の一方的な価値観の押し付けは通じない時代であることを述べている。

「大きなかぶ」（A. トルストイ原作）を題材にした音楽劇では、ねこと犬は、鳴き声のニュアンスだけで物語を表現することになり、担当になった受講者は、抑揚や体の表現で伝えることになった。子どもの多様な発声を理解し、歌声を肯定する素地を作ることが、保育者に求められる子どもの音楽理解であり、西洋音楽のみで通用する声だけではなく、様々な声を受容して表現できる資質を汎用していく必要性が示唆された。第3回目の話し合いでは、「リトル・マーメイド」（ディズニー作品）のデュエット（二重唱）などの声の響き方や、大道具（大きな岩や海の中の生き物）の動き方を本物に近づくように変化させようと検討している語句が頻出していた。受講者が、演じることの面白さや表現する意義を実感する経験になっていることが必要であり、本実践は、受講者が想像力を膨らませ、音の長さや抑揚、強弱、声色を調整しながら、相互の演技や動きを見て、個としての表現に繋げている様子を観察した。NBM サイクルの中で活動の振り返りの場としてラウンド・ロビンを採用することは、文化活動への参加意識を高め、個の表現力を協同活動の中で向上する手立ての1つであると言える。

V. おわりに

2017年度前期の授業評価アンケート調査を実施した。回答は、「1 まったく思わない」「2 思わない」「3 どちらでもない」「4 そう思う」「5 とてもそう思う」の5段階評価である。有効回答数は38であったが、全ての項目の平均値が4ポイント以上であった。記述には、「感知」のステップにおける「子育て交流室での保護者との対話が、保育実践につながる経験になった。」というものが見られた。

保育現場における音楽分野における汎用性は、音楽劇のプロフェッショナル集団として鍛え上げるのではなく、その過程において、社会人基礎力のようなジェネリックスキルを育成するに近い。そのため、指導者は、監督のように対峙するのではなく、個の表現の模索に伴走する指導スタイルで、カリキュラム、授業計画する必要性を考察した。今回は、NBM 学習サイクルの効果については検証できなかったが、稿を改めたい。

付記

本論文は、その一部を保育者養成教育学会第5回大会において発表した。また、本研究は、2020年度桜花学園特別研究費の助成を受けて実施した。

引用文献

- (1) 山地弘起 (2014) アクティブ・ラーニングとはなにか 大学教育と情報 (通巻146号) No. 1 p. 5.

参考文献

- 内山伊知郎監修 児玉珠美・上野萌子編 (2015) 『0・1・2 歳児の子育てと保育に活かす マザーリー
ズの理論と実践』北大路書房
- 小畑千尋・佐藤恭子・遠藤宏紀・田代七奈美・中島瞳・渡部智喜・玉手英敬・吉村敏之 (2020) 幼
小接続を考慮した声の表現に着目した音楽科の授業開発—対話型鑑賞による「聴こえる美術館」
の授業実践を通して— 宮城教育大学教職大学院紀要 第1号 pp. 61-71.
- 上篠晴夫 (2014) 修正版ラウンド・ロビンの理論的考察 日本協同教育学会大会論文集 pp. 84-85.
- 小柳雅子・小島千恵子・高須裕美 (2014) 保育者の成長に必要な能力と認識に関する研究—保育の
制度・感性・技術に着目して— 全国保育士養成協議会第53回研究大会 研究論文集 p. 176.
- 小柳雅子・小島千恵子・高須裕美 (2015) 保育者の素養に関する学生の意識 全国保育士養成協議会
第53回研究大会 研究論文集 p. 84.
- 鈴木裕子 (2009) 幼児の感性を具体化する試み—幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして— 保育
学研究 47(2) pp. 132-142.
- 鈴木裕子 (2013) 「幼児の感性尺度」の効果的な活用に向けた検証—保育者の捉える「幼児の感性」
の分析を通して— 愛知教育大学幼児教育研究 第17号 pp. 3-10.
- 松尾徹 (2018) グループ学習と協同学習は同じではない 大阪女学院大学・大阪女学院短期大学 教
員養成センター機関紙 第103号 <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/> (2020/12/30)
- 山崎泰央 (2016) 主体的な学習を促す「学ぶ場」づくりの実践 京都大学高等教育研究 22 pp. 99-
102.
- 溝上慎一 (2007) カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点—アクティブ・ラーニングの
検討に向けて— 名古屋高等教育研究 第7号 pp. 269-287.
- Scheele, P. R. (2000) *Natural Brilliance*. U.S.A.: Learning Strategies Corp. シーレイ, P. (2016) 『潜在能力
でビジネスが加速する』(神田昌典監修・今泉敦子訳) フォレスト出版

(受理日 2021年1月7日)